

金曜コラム - 選手よ、文章を書いてみよう

ジョン・ユンス (スポーツ評論家・聖公会大教授)

19世紀のある哲学者は、自分が想像する人類の未来をこのように描写した。「全ての人が自ら望んだ分野で自分自身を育てることができる。人々は自分がしたいように、朝には狩りをして、午後には釣りをして、夜には羊の群れに餌を与え、夕食を食べてからは本を読んで文章を書く。必ずしも漁師や牧童や批評家にならなくても思い通りにすることができる。」

そんな世界が来るか？おそらく不可能である。自らやりたいことを朝と夕方に変えて楽しむ未来？そんな世界は永遠に来ないだろう。そうはいつでも、それぞれの仕事で抑圧されたり疎外されたりしないよう、お互いが少しずつ尊重し助け合おうというメッセージとしては今もなお意味はある。新年最初のコラムを準備しながら、ふと、この哲学者のメッセージが浮上したのもそのためである。

よくスポーツは人々に喜びと希望を与えるという。平昌冬季オリンピックに始まり、「朴ハンソマジック」に終わった2018年の輝く瞬間は、間違いなく人々に感覚的な喜びと教訓メッセージまでプレゼントしたものである。(訳注：朴ハンソはベトナムの国家代表サッカーチーム監督)

しかし実際にそれを実行した選手たちは、果たして自分の仕事に喜びをまともに享受したのか。競争が日常化された職業であり、至る所に位階序列や暴行の弊習が敷かれていることもあり、選手たち、特に成長期の学生選手たちの生活リズムはいつも職業人よりもはるかに硬直している。このような状況では選手たちが「自分がしたいように、それぞれの能力と必要に応じて」運動をするというのは、人類全体のユートピアを作ることよりも難しく見える。

そうは言っても、新年初日だけでも選手が少しは安全で快適な状態の中で、最小の人間品位を維持して生きて行くことを望む。

数日前、チュ・シンス選手(訳注：米国メジャーリーグのテキサスレンジャーズの外野手)が国内メディアとのインタビューで、このような話をした。米国では、運動をしようとしたら勉強も良くしなければならぬ。訓練を終えた後、ほとんどは各自の趣味をし、ある選手はギターを学んで正規アルバムまで出した。この程度で終わったなら「スポーツ先進国」の風景を紹介した程度だがチュ・シンスは慎重に吐露した。「私は幼い頃から野球だけだった。率直に言って恥ずかしい。私は勉強をしっかりとしなかったので、今でも子供たちにどのように勉強しなければならぬか説明をしてあげられない。」

「韓国型スポーツ過程」を経てきた人々であれば、チュ・シンスのこの苦しい心情が何なのかすぐに理解しただろう。これは単に子供の勉強を手助けするのは困難だという話ではない。多様に変化して展開されるこの国の入試制度は選手出身の両親だけでなく、一般的な学習過程を終えた親たちも全くついていけない。チュ・シンス選手が子供たちに勉強や入試についてアドバイスするのは難しい事を責めることはできない。多分チュ・シンス選手が持つ心情の核心は、スポーツのみしてきた生活の悔恨だろうか。野球という「一つの井戸」のみ掘って世界的な選手になったが、その間に世界の多くの美しさと価値と感情を十分に経験できなかった事、それで失ってしまったいくつかの貴重な縁と時間に対する苦い感情だ。チュ・シンスのように成功した選手でもこのような心情なのに、そうでない多くの選手たち、選手になる過程で荒廃した社会に早くも放り出された人々の心情は如何ばかりであろうか。

そのような意味で私は、新年初日のコラムという口実で韓国スポーツ界に1つ提案をしたい。「勉強する学生選手」とか「上意下達文化の根絶」のような話はたくさんしたし、また各单位と種目での制度的な努力をしているので、これを繰り返したくはない。

私の提案は簡単である。今年だけは（学生）選手が文を書こう、という事だ。短い文章を読んで感想を書くこともできる。一日中揺らいでいた自分の心の状態を振り返っても良いし、試合をしてふと見上げた青空について殴り書きしても構わない。何か「約束」や「誓い」を書けというのではない。「願い事受理書」でもなく「抗命」ではなおさらない。

（学生）選手も感情を持った人格であり、その感情と人格は「選手」という言葉で単純化できない。様々な感情を持った（学生）選手を単一のプログラムにつぶして入れてはならない。ある選手は本を読みながら、自分の感情を調節することができ、ある選手はじっと散歩をしながら肉体的にリラックスすることもできる。感情模様は様々である。外的刺激に応じて、その模様が揺らめくパターンも人ごとに違う。ところが実際には本人がそれを認知せず、自らの感情調節の鍵が見つからない。

文を書く事は自分の心の風景を探り、それを誰かに表現する最高の方法である。選手が簡単な文章であっても、書く事はまず指導者とその権利と時間を配慮しなければならず、指導者もそうすることができるよう、上級団体が制度的に後押ししなければならない。苦々しいことに私たちの社会は、人が文章を書くために制度全体が動かねばならない状況である。しかし、そのようにして車輪が動き始めれば間違いなく私たちのスポーツは変わるだろう。「午後には釣りをして夕方には本を読む」式のロマンチックな空想であっても、どうにか文を書いてみると自分の感情を振り返ることができ、そうして自分自身を取り戻す事ができる。

今、韓国のスポーツをリードしている責任者と監督は特に注目しなければならない。過酷な訓練、かたくなな日常、そして自らを顧みる事ができず、ひたすら「英雄」「スター」「伝説」のような空虚な言葉で自分たちの空っぽな内面を満たしてきた指導者たちは、新年最初の日の出にあたり自らの短い文章でも書いてみよう。おそらく何文字も書けず手が止るだろう。文章を書くのに慣れていない面もあるが、実は複雑で弱い自分の内面を緊張させて生きてきたので、自分の人生をじっくり振り返った事が無いからである。そのように息苦しく尖った文化を後輩たちに残すことはできないのではないか。

*この記事は、2019.1.1 京郷新聞[ジョン・ユンスのオフサイド]に掲載された文章を共有します。

01 ニュース 1 2019.01.02

【 ト・ゾンファン長官「2032 オリンピックの南北共同誘致は、世界的関心事」 】

ト・ゾンファン文化体育観光部長官は2日、政府の世宗庁舎別館の大講堂で発表した新年の辞で「2032年夏季五輪の南北共同誘致をはじめ、金剛山観光など南北交流と関連したことが新たな課題として置かれるようになる」と明らかにした。ト長官は「文化芸術と体育、観光分野に残っている課題がまだ多い」とし「残りの問題をうまく解決して、新たに仕事を開始する一年になることを願う」と言いました。

続いて「南北、米朝の状況が多少膠着しているが、2032年夏季五輪の南北共同誘致の推進など、南北体育交流は今世界的な関心事になった」とし「金剛山観光など南北観光交流も新たな課題として、私たちの前に置かれるもの」と付け加えました。彼はまた、「今年の訪韓外国人の目標を過去最大の1800万人にした」とし「南北の平和な雰囲気を持続」および「中国市場の回復に伴う団体観光客の増加」を前提に政策意志を込めて高く目標を設定した」と言いました。

また「韓流を導いた文化コンテンツ産業は過去10年間で輸出が4倍に成長し、青年労働者が他の産業の2

倍水準である未来産業」だとし、「第4次産業革命、サービス業時代に私たちは、文化産業をさらに支援して育てて行かなければならない」と言いました。ト長官はオマールワシントンの詩「私は学んだ」を引用し、「内には包容国家、外には平和と繁栄、その中心に文体部があるという誇りを持って、今年の仕事に取り組んで欲しい」とし「手を握って力強く前進しよう」と表明しました。

(訳注：元大リーガー、オールアメリカンウエストのヘッドコーチ、詩「私は学んだ」の全文は下記参照

<http://blog.yes24.com/blog/blogMain.aspx?blogid=gofor9&artSeqNo=1238759> 韓国語と英語)

*出典：<http://news1.kr/articles/?3515274>

02 中央日報、2018. 12. 28

【 チュ・シンスが息子に“勉強してこそ運動もできる” 】

メジャーリーグで活躍中のチュ・シンス (36・テキサス・レンジャーズ) は三人の子供の父親です。TV番組に出演して優しいお父さんの姿を見せてくれた。去る23日韓国に来た時も、彼は妻のハ・ウォンミ (36) さん、息子のムビン (13)・キョンウ (10) 君、娘ソヒ (8) 嬢の手を握って一緒に入国しました。

特に長男ムビン君グンはお父さんより背が高く視線を集めた。チュ・シンスの背は1m80cm、息子のムビン君は1m83cmだ。ムビン君は米国で野球とバスケットボール・フットボールを楽しむ。チュ・シンスは「ムビンが特別に良く運動できるかは分からない」と言いました。「野球天才」李ジョンボムの息子李ジョンフ (20・ヒーローズ)、「ピンポンカップル」の安ジェヒョン、ジャオズミンの息子であるプロゴルファー安ビョンフン (27) のように、エリートスポーツ2世が稀にいます。しかし音もなく消えた2世たちがもっと多いです。

釜山スヨン小学校の頃から野球だけをしていたエリートスポーツマン、チュ・シンスはムビン君にどのような父であり先輩でしょうか。去る25日に会ったチュ・シンスは、「ムビンが野球だけするのではなく他の運動もする。美術も教える。今ではムビンが好きなことをさせる段階」と言いました。

ムビン君が韓国で学校に通っていたら中学1年生です。通常は小学校4~5年生の時に野球部に入ります。国内では若い年齢で早目に進路を決めた後、プロ選手を夢見る場合がほとんどです。しかし、チュ・シンスの考えは違いました。チュ・シンスは「ムビンが韓国の野球部にいたら「上手だ」という言葉を聞いただけ。ところが米国で野球のうまい学生がどれ程多いか。今後、自分より優れた選手とたくさん会い、競争すること」と言い、「今は勉強しながら多くのことを経験しなければならない時だ。米国では運動をしようとしたら勉強も頑張らなければならない」と言いました。

米国では「学生選手」たちも高校の時に一定の単位を取得して大学に進学できます。野球とフットボールを並行した韓国系のカイナ・モリ (21・オクラホマ大) は、メジャーリーグ新人ドラフトで1ラウンド9番指名 (オークランドアスレチックス) を受け、大学フットボールの最高の選手に与えるハイズマントロフィーを受賞しました。

チュ・シンスは「私は幼い頃から野球だけだった。率直に言って恥ずかしい。私は勉強をしっかりしなかったのが、今でも子供たちにどのように勉強するか説明をしてあげられな」と言い、「マイナーリーグで会った外国人選手たちがトレーニングを終えた後、各自の趣味を楽しむのを見て“あのようになるからメジャーリーグに行けないんだ”と思った事もあった。しかし彼らの中から成功したメジャーリーガーが複数人出てきた」と言いました。

シンシナティ・レッズ時代にチュ・シンスの仲間であったブロンソン・アローヨ (41) は、ギターを学

んで正規アルバムまで出しました。チュ・シンスは「そのような選手はスランプが来てもよく克服したよ。メジャーリーグに行けなくても他の才能と経験を生かして第2の人生をしっかりと立てるのをよく見た」と説明しました。

*出典：<https://news.joins.com/article/23243743>

03 連合ニュース 2019.12.27

【 国民が選んだ 2018 年最高の経済政策は'我が町の生活 SOC' 】

図書館・体育施設など、日常と密接な施設への投資を拡大する構想が今年の経済政策の中で最も良い評価を受けました。

企画財政部は「生活 SOC（社会間接資本）と一緒にする我が町リモデリング」が一般国民・政策専門家・企画財政部出入り記者など 796 人が参加した経済政策評価人「政策 MVP」で 1 位である最高賞に選ばれたと 2018 年 12 月 27 日明らかにしました。

この政策は図書館、生活体育施設、生活安全インフラなどの生活と密接した 10 の分野に投資を拡大する内容を含んでいます。これらの分野で今年約 5 兆 8000 億ウォンが投入され、来年にはその規模を 8 兆 7000 億ウォンに拡大するというのが政府構想です。

2 位であるボグム賞（訳注：次の意）には主力産業構造調整などによる地域対策である「危機に陥った地域のための特段の地域活性化対策」が選ばれました。斬新賞には「生活の中の革新アイデア創業に 2 千万ウォン融資」政策が、国民広報がうまくいった政策に与える美人賞には「油類税と乗用車個別消費税引き下げ」がそれぞれ選ばれました。

このほか、外国為替サービスと関連したフィンテック（訳注：FinTech は金融 Financial と技術 Technology の合成語。金融と IT の融合を通じた金融サービスおよび産業の変化の通称）育成策を盛り込んだ「革新成長と需要者中心の外国為替制度・監督システムの改善案」、全国を回って企業投資の障害解決を模索した「投資キャラバン」は、それぞれ影賞と挑戦賞を受けました。

*出典：<https://www.yna.co.kr/view/AKR20181227110300002?input=1195m>

INFOMATION

体育市民連帯 ソウル市 瑞草区 瑞草洞 1485-3 スンジョンビル 305 号

체육시민연대 서울시 서초구 서초동 1485-3 승정빌딩 305 호

Tel : 02-2279-8999、E-mail : sports-cm@hanmail.net

ホームページ：<http://www.sportscm.org/>

日本語訳：佐藤好行 新日本スポーツ連盟 国際活動局 韓国担当 jr1fep@jarl.com